

読み書き同時教育の誤り

戦前の教育にも大きな誤りがある。“読み”と“書き”を同時に学習させていることである。私は 14 年間にわたって、“読み”と“書き”とを分離して学習させる方法を試み、同時教育とその効果を比較してみた。

まず“読み”に習熟させ、漢字の字形が頭の中に鮮やかに描くことが出来るまで待って、“書き”の学習に進めるのである。漢字は、“読み”に限って言えば、低学年でよく覚えるし、字形の複雑な字の方が記憶の手がかりが多いので覚えやすいことがわかった。

だから、どんなに漢字の多い文章を与えても、一年生は困るところか喜んで読む。私の研究所では、三歳の幼児が、六年生の教科書よりも漢字の多い文章をすらすらと読んでいる。かなが多い文章ほど、漢字の少ない文章ほど、読みにくそうである。

一年生は学習漢字が 76 字だが、五百字与えてもやすやすと覚えて読めるようになる。“読む”学習を重ねて半年もすると、字形が頭の中に鮮やかに描けるようになる。そこで“書く”学習をさせると、従来の

十分の一の学習時間でりっぱに書けるようになる。

“読み書き同時教育”は、労ばかり多くて効果の少ない方法である。“読み先習”にすれば、労が少なくなって効果が大きくなる。“読み”が“書く”能力を育てる原動力である点では、“話す”“聞く”場合と全く同様である。

“本立って道生ず”である。何か根本であるかをよく見極め、その根本を培うことに努めることが大切である。国語が根本教科であり、国語では“読み”が根本である。今の教育の病弊は、この。根本”が立たず、根本を培うことを全く知らないことがその最たるものである。これも「悪平等の弊」のなせるわざなのである。